

環境文明社会づくり あれこれ (52)

源流 (52)

ちょうどこの頃、水俣病と並び全国的にも問題視されていたものに、神通川下流で“イタイタイ病”（「イ病」）として知られるようになったもう一つの公害病がある。この奇病の発見者であり命名者は、富山市内の開業医をしていた萩野昇さん。彼は訪れる患者のうち神通川の水を飲み、この流域の農産物をよく食べて生活してきた経産婦に、骨がもろく折れ易く“痛い、痛い”と悲鳴をあげて苦しがる女性が多いことに気づき、1955年、学会にイ病について報告をし、社会の注目を集め始めた。産業の発展とともに発生した水俣病や四日市ぜんそくなどと同様に、イ病の実態と原因を巡る社会の関心も騒がしくなった。

厚生省は1963年度から医療研究助成金、65年からは公害調査研究委託費により、総合的な研究班を組織して、病気本態と原因究明に取り組んだ。それを下敷きに、橋本道夫公害課長は、水俣病に対する対策の遅れを強く遺憾としていたので、イ病に対しては行政が責任をもって原因を究明し、その結果をもって速やかに必

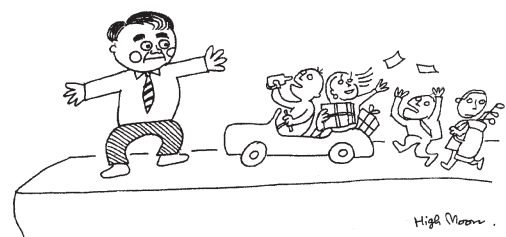
要な対策を実施しなければとの固い決意をもっており、イ病の原因調査を財団法人公衆衛生協会に委託した。丁度その頃（66年4月）、水質汚濁調査法も一通り大学院で勉強してきた私が課員に加わったこともあり、調査班（座長は国立公衆衛生院の重松逸造部長）を設け、金沢大や岡山大の病理学者や化学分析学者に加えて、現地、富山県衛生研究所の若手分析担当者が加わり、厚生省からは事務局の役割で古市圭治技官（医師、後に大気保全局長）と私が参加した。

まず手始めに、古市技官と私は富山市に出張し、県庁の担当者たちと情報交換した後、すぐに萩野医師を訪ね、患者の病態や原因物質（当時はずでにカドミウムが疑われていた）などについて意見を伺った。さらに岐阜県神岡町にある鉱山に赴き、鉱業所の所長らに面会すると、「うちの廃水中に含まれるカドミウムが原因ではと世間では言われているが、神通川の上流の岩石等に含まれるのが問題なのでは」という主旨の話も出てきた。そこで調査班は、水や土壌中のカドミウムなど重金属の濃度を測るサンプリング地点とし

加藤 三郎

ては、鉱業所上流（上高地の裏側）から神通川に流入する主な支流から、さらに富山湾海底上など、もれなく選定した。また分析ミスがないよう、すべてのサンプルを3分割し、1つは金沢大学、1つは岡山大学、もう1つは県衛生研究所で、クロスチェックしてもらうことにしたが、水質分析の結果はどの地点でも3機関でほぼ一致しており、特に県衛生研究所の分析専門家たちの健闘ぶりに、私は強く印象付けられた。

このような分析結果と、重松座長らの医学的知見とを総合し、「行政の責任」下で橋本課長らがとりまとめ、それを局長、次官らの目を経て、68年5月8日、園田直厚生大臣が「富山県におけるイタイタイ病に関する厚生省の見解」を発表した。ここでは、イ病本態と発生原因のほか、今後の予防措置（鉱山での流出防止や簡易水道の設置を含む）も明記し、政府としての責任を初めて明らかにした。私にとっては、入省2年目の大仕事で、この発表の日付は57年経った今も忘れていない。



High Noon .